

はじめに

「知内ってどんなところ？」と考えながら、知内の歩みを振り返ってみました。知内という地域にさまざまな人が集まり、暮らし、あ
るいは去り、というように人びとが係わることよって今日の知内の
姿ができたのだと思います。本分冊では、いつ頃、ど
のような人びとが、どのように知内と係わってきたのか、ポイント
になりそうなことについていろいろな史料をもとに探ってみま
した。

地元雷公神社に残る江戸時代の記録「大野土佐日記」の存在、江
戸時代に蝦夷地を歩いた人びとが残した記録、明治初期に北海道を
管轄した「開拓使」の公文書、蝦夷地から北海道となり本格的な開
拓が始まってから50年を記念して大正初期にまとめられた「知内村
誌」や「函館支庁管内町村誌」、明治中期から昭和にかけての北海
道の行政機関「北海道庁」の公文書、知内町の商家に残っていた戦
時中の衣料切符などの生活資料、知内で暮らした方々の聞き取り記
録、小学生の作文集、町制施行の申請書、行政による町の総合計画
など知内町の公文書、広報誌などの行政刊行物や新聞、町民アンケー
ト、地形や気候、植物や動物などの自然環境、土の中から出てきた
石器や古銭などの遺物、石碑、お祭りなどの行事や生活習慣などな

ど、たくさん史料が残っていました。これらの史料が当時の知内
の様子とともに、それが現在の知内の人びとの暮らしや産業など
どのようにつながっているのかも教えてくれました。

これらの史料の中から2点を本分冊の後半に収録し、実際の記録
にその時代の知内の様子がどのように表現されているのかを紹介し
たいと思います。1点は明治11〜12年にまとめられたお雇外国人エ
ドウィン・ダンによる地勢の調査報告書です。もう1点は大正初期
の知内を記録した「函館支庁管内町村誌／知内村」です。史料の原
文を見ることが「史料」の持つ意味を感じてもらえることを期待し
ています。

過去の史料を探ることで過去の様子だけではなく、現在までの流
れ、さらには未来へのヒントを見いだせることもあると思います。
そして今現在の記録も50年後、100年後にはそれまでの歩みを知るこ
とができる史料となります。現在、さまざまな地域で過疎化、高齢
化の問題がありますが、知内も例外ではありません。知内への人の
出入りは、国の政策による影響も大きいと思いますが、そんな中で
町民の集合体である町がこれからどういう方向をめざすのかを町民
のみなさんが考える時、史料がたくさんのことを教えてくれるで
しょう。本分冊がその参考になれば幸いです。

「宮崎美恵子」